d　多胎児の発達－主に精神発達面からの検討－

東京都立大学名誉教授　山下俊郎
鹿児島大学教授　島田俊秀
東京家政大学助教授　大滝ミドリ
東京家政大学講師　川合貞子
東京家政大学助手　高橋裕子

山下五つ子の精神発達について，第5次報告として，1981年2月11日すなわち生後5年以降，1982年2月4日すなわち生後6年にいたる1年間の発達状況の概略について報告する。

1. 研究の方法

五児の知的発達の測定尺度としては，山下俊郎の山下幼児発達検査及びWechslerのWPPSIの日本版を使用する。両テストは，3ケ月間隔で交互に施行し，同一テストの間隔を6ケ月とする。

また，5才3ケ月時に，五児の行動特性を把握する目的で，依田明・詫摩武俊による幼児用の性格テストである太郎・花子テストを施行する。

また，五児は小学校入学期を迎えているので，学校生活に必要な心身の準備がどの程度できているかを把握するために，松原達哉の就学レデイネステストを，6才0ケ月時に施行する。

さらに，これら十種の測定尺度に加えて，津守貞・磯部景子の乳幼児精神発達質問紙への自記回答を母親に依頼する。この母親による回答は，3ケ月間隔で行なう家庭訪問時に依頼するものとする。

なお，山下幼児発達検査，WPPSI，乳幼児精神発達質問紙は，前年度に引き続き施行するものであり，太郎・花子テスト及び就学レディネステストは，本年度新に施行するものである。

2. 結果の概要

a　知的発達

山下幼児発達検査及びWPPSIにおける五児の得点についてみると，WPPSIの得点により顕著な上昇傾向が認められる。しかしながら，このような数値の上昇をもって，単なる知的発達に原因すると解釈することには危険がある。むしろ，生活年令の上昇により，テストへの習熟度が増し，テストへの慣れに原因することが，五児のテストを受ける態度の変化を通して推察される。

それ故，本年度の五児の結果を同年令集団の結果と直接比較すべきでないことが指摘されよう。むしろ，ここでは，五児に対して，同一方法が施行された結果を重視すべきであろう。つまり，五児間の結果の差異は，五児の個体差として解釈されることが妥当であると考えられる。

このような視点から五児の知的発達について述べる。

ここで使用したテストは，種々の面で異なっているが，テストの構成についてみた場合には，言語刺激に対して，言語を用いて応答する検査（項目）である言語性検査（項目）と言語及び視覚刺激に対して，動作（主に，目と手の協応を必要とする）で応答する動作性検査（項目）から構成されている。五児はいずれのテストにおいても，言語性のものよりも，動作性の得点が高い傾向が認められ，特にHi，Fu，Sa　にその傾向が顕著に認められる。

つぎに，言語性検査結果及び動作性検査結果が独立して示されるWPPSIの結果に基づいて五児間の差異について検討する。

表1は，5才0ケ月から6才0ケ月までのWPPSIの結果の平均値を示している。表中のVIQは言語性の結果を示し，PIQ　は動作性検査の結果を示している。また，IQ　は全検査の結果を示している。

五児の中でYoのIQが最も高く，ついでFuとHi　であり，2児間に差異は認められない。ついでSa，Taの順位を示している。言語性検査では測定誤差3.58を考慮に入れると，YoはTaより高いことは考えられるが，五児間における差異は余り顕著とはいえない。一方，動作性検査では，五児間に顕著な差異が認められる。Yo　は他児に比して顕著に高く，ついでFu，Hiであり，その後にSaが続き，最も低い結果を示すのがTaである。この動作性検査結果における差異が，先にみ

た全結果における差異を導いていることが明確である。

なお，数値的にはFuとHiは類似しているが各テスト時における下位テストの変動についてみると，Fuは比較的安定した上昇傾向が認められるのに対して，Hiは各測定時における変動が大きいことが指摘される。

つぎに，各下位テストにおける五児間の差異についてみるとつぎのようなことが指摘される。

まず，生活経験に根ざした常識的な知識はFu，Hi，Yoが他児よりも有意に高く，また，数量概念については，Yo，Taが他児よりも有意に高い。そして具体的，現実的な場面での判断力は，Saが他児よりも有意に高いといえる。

さらに，集中力・反応速度に関しては，Hi，Yoが優れ，注意力及び部分と全体との関係把握では，Fu，Yoが他児よりも優れている。また，落着いた，見通しをもった行動では，Fu，Hi，Yoが優れている。

以上の結果から知的特性における五児間の類似度についてみると，男児であるFuとYoの間の類似度が高いのに対して，女児間にはそのような傾向は余り顕著に認められない。むしろ，HiはTaやSaとの類似度よりも，FuやYoとの類似度が認められる。

その他，テスト時に観察された行動として，他児の結果に対する関心及び自己の結果と他児の結果の比較・競争が指摘される。このことは，自己理解を他児との関係の中で促準しようとするものであり，これは社会性の発達を見るための指標の1つとなるものであるといえよう。

b　性格特性

ここでいう性格とは，恒常的で，不変性をもった性格特性を意味するものではなく，親のしつけ，あるいは，家庭環境等によって形成された行動傾向をさしている。テスト用の図版は21枚からなっており，各図版には，子どもが日常生活で体験するような場面が描かれている。すべての図版には太郎または，花子という主人公が登場する。子ども自身とその主人公を同一視させることにより，子ども行動傾向をみようとするものである。

このテストで測定される行動特性とは，独立―依存，活動性大―活動性小，あたたかい―つめたい，反抗的―従順である。

独立とは，自分の身のまわりのことがひとりでできる，自己主張ができるものをさし，逆に，親や他人の助力を求める，自己主張ができないものを依存であるとする。

活動性大とは，何らかの形で解決をせまられる状況に直面した時に，直接的・実際的行動によって，積極的に事態を解決して行こうとするものをさし，逆に，事態に直面することを避ける行動であるところの傍観，あるいは，大人に言いつけるというような消極的行動をとるものを活動性小とみなす。

あたたかいとは，他人へのおもいやり，同情心のあるものをさす。つめたさとは，他人の不幸に無関心であることを意味する。

反抗的―従順は，母親と子どもの関係についてみる尺度である。反抗的とは，親のいうことをきかずに，なんとか子ども自身の要求や意志をおしとうそうとするものをいい，従順とは，親のいうことが，子どもの要求と一致しなくとも，親のいうとおりに行動するものをさす。

このテストでは，これら4尺度とは別に，社会的成熟についてみる指標として，応答における，“泣く”という頻度を問題としている。

図1は，五児の行動傾向を示したものである。

五児ともに，反抗的―従順の尺度においてやや反抗的ということから，母親に対する自己主張はかなり明確にできるようになっているのに対して，独立―依存の尺度では，Hi，Saはやや依存的傾向が強く，母親以外の他者に対して，余り自己主張ができないことが考えられる。また，Ta以外のものは，他児への関心，特に，同情する傾向がやや弱いことがうかがえる。

このように，特定の尺度については，五児は同じような行動傾向を示しながらも，総体としてのプロフィールでは，五児がそれぞれに異なる様相を呈している。

また“泣く”という応答頻度についてみると，Yoが最も高く，同年令の子どもに比較しても高いといえる。Fuには全く“泣く”という応答は認められない。Hi，Ta，Saは同数で，同年令の子どもに比較して，特に高いとはいえない。

今回，明らかにされた五児の行動傾向は，今後の生活経験の中で，諸々に異なって行く可能性を秘めたものとして理解しておくことが必要である。

c　就学に関するレデイネス

就学に関するレデイネスを把握するために，就学レデイネステストを施行する。このテストは，運動能力と健康，社会生活能力，一般的知識，基本的生活習慣，性格・情緒の発達の五分野から構成されている。質問項目は75あり，回答は"はい""いいえ"で行なわれるものである。テスト式の回答は，母親の自記回答による。

結果は，五児ともに小学校に就学するために必要な心身の発達が大変優れていることを示している。分野別に，レデイネスをみると，性格・情緒の発達の分野に含まれるものが他の分野のものに比較して，多少得点が低い傾向が認められる。母親に対しては，五児についての回答を依頼したが，母親の回答には，五児間の差異が認められない。これは，回答が"はい""いいえ"の二肢選択であったことも多分に関連するであろう。また，このテストに含まれる質問項目は，日常生活に基づいた行動，態度，知識を問題としており，五児は，すでにこのような行動レベルの常識は充分に身につけていることを示すものといえよう。

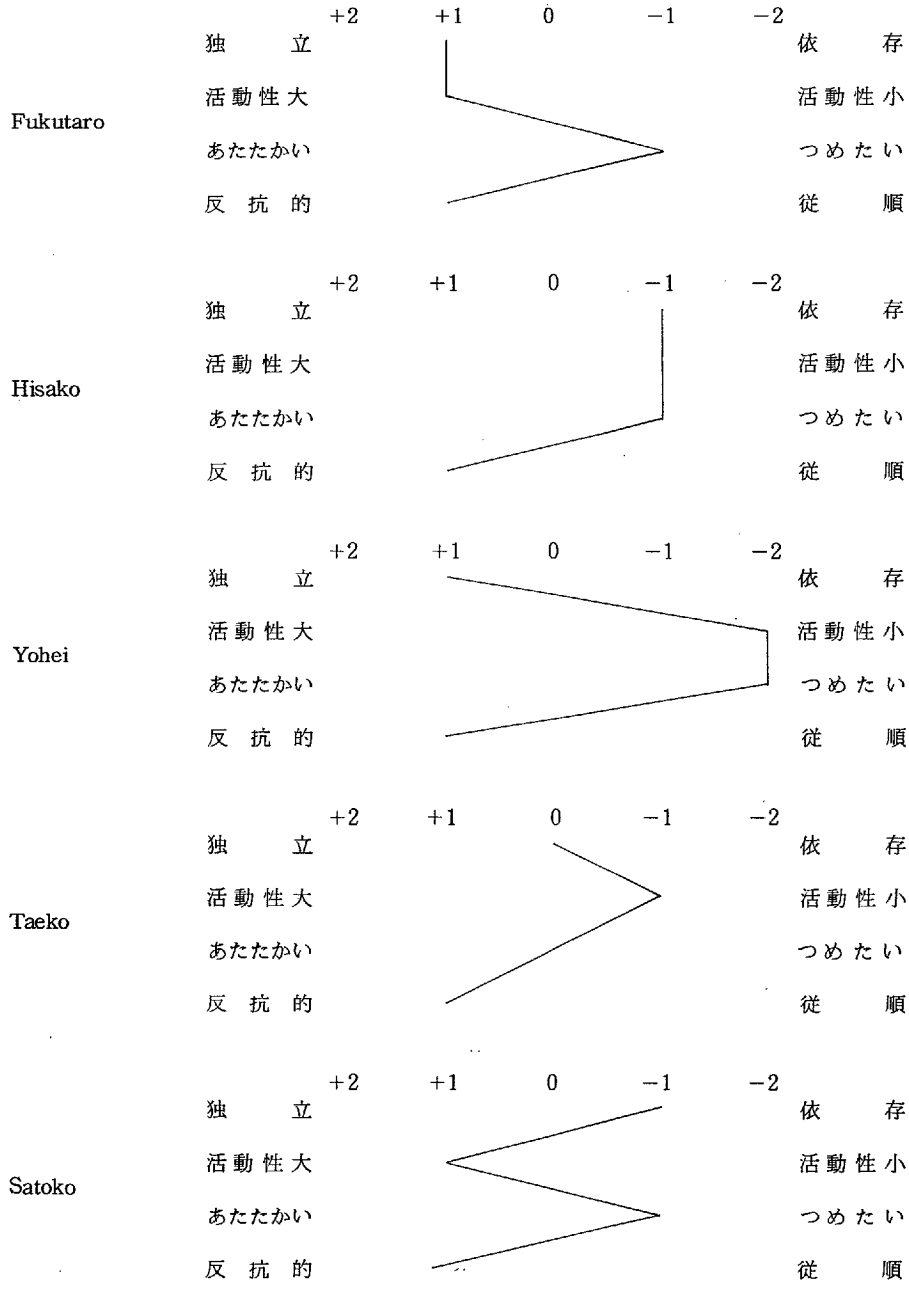
就学レデイネステストにおいて認められた五児間の差異の消失は，母親の自記回答による乳幼児精神発達質問紙においても同様に認められる。

このことは，五児間における差異をより詳細にとらえるために，行動の質的分析を行なう必要があることを示唆しているものといえる。この点に関しては，家庭訪問時の行動観察記録及び各測定尺度施行時の行動記録に基づいて，改めて検討する予定である。

表1.　五児のVIQ，PIQ及びIQ

WPPSI \ Name	Fukutaro	Hisako	Yohei	Taeko	Satoko
V I Q	106.3	105.3	111.7	102.7	107.7
P I Q	138.7	137.3	148.7	114.0	122.7
I Q	126.7	125.3	136.0	109.7	118.0

図1.　性格特性


+2 +1 0 −1 −2
独立
活動性大
あたたかい
反抗的
依存
活動性小
つめたい
従順
Fukutaro
Hisako
Yohei
Taeko
Satoko

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

山下五つ子の精神発達について,第5次報告として,1981年2月11日すなわち生後5年以降,1982年2月4日すなわち生後6年にいたる1年間の発達状況の概略について報告する。